

— 第18編 — 観光を支える日々の暮らし

ヴェネト州^{*1}の州都ヴェニス^{*2}の名を知らない人はまずいない。その集客ブランド力は圧倒的だが、そこで繰り広げられる日々の暮らしはそれほど知られてはいない。家財道具一式を詰め込んだルノーで初めて乗り込んだのは1974年2月上旬、アテネへ移動する道すがらのことだ。寒気が支配する曇り空のオフシーズンで、静かな観光の島であった。だから、この島で繰り広げられる日常の光景をつぶさに見る事ができた。その後、20年近く経ってから、数回にわたって訪問する機会に恵まれた。当然だが、その度ごとに新たな発見がある。基本は徒歩だが、少し目線を下げて船の上から眺めるヴェニスも格別である。

歩き回れるまちは幸せだ。それにも増して、迷路のような細街路に彷徨いこむことのできるまちはもっと幸せだ。特にヴェニスは小さな島だから、迷ったところでやがては自分



写真18-1 ヴェニスの日常と非日常

*1
Veneto: イタリア北東部の州

*2
Venizia: 人口約26万人(基礎自治体)のムーネ



写真18-2 船着き場の小広場

白さである。

運河沿いの小さな船着き場には小さな広場があつて、必ずカフェやトラットリアが椅子を並べている。そんな店の品定めをするのも一興だ。目を上げれば、狭い運河の上空に洗濯物が翻る。向かい合うアパート同士を滑車で滑るロープが渡され、互いに利用し合える暮らしの工夫である。水際の市場には船で運ばれてきた色とりどりの生鮮品が溢れる。売り買いする人々の声が響きあい、石の壁に反射する。

こうした日々の暮らしの舞台とシーンに羨望の目を向けながら、しかし充実したヴェニスでの一日は過ぎてゆく。

の位置を確認できる安心感がある。いたるところに記憶に残るアイスポットやモニュメントがあるからだ。それらをトレースしながら、何度も回りを道をして記憶に刻んでゆく楽しみを体験することが出来る。

地図やGPSに頼らず歩くことの面



写真18-3 水際の市場